

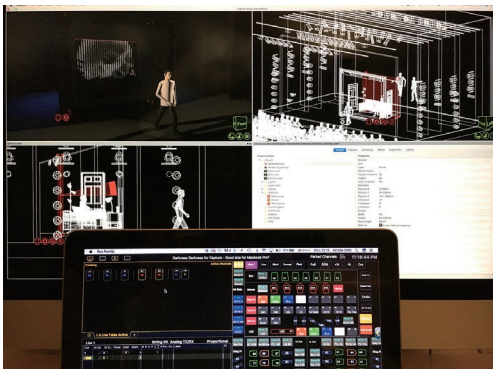
小野 あずさ

バーチャルとリアリティー

近年、目まぐるしいテクノロジーの進歩とともに、複雑なプログラミングが要求されるようになってきました。それに伴って、ビジュアライザー / シミュレーターを使って、事前打ち込みをする照明家 / テクニシャンをよく見かけます。自分も今までは、照明卓に付属している簡単なビジュアライザーを使うだけでしたが、もっと具体的に作り込みたいとき、ビジュアライザーソフトウェアを使う必要がでてくると思ったので、好奇心にかられ、どのような種類のビジュアライザーがあるのか、探し始めました。

数ヶ月前、ロンドン中心部で行われた、Vectorworks Spotlight 2017のコンファレンスに参加したとき、Vectorworks 2017の新しい機能や、提携しているVision（3D ビジュアライザー / シミュレーター）のデモンストレーションを見学しました。自分は、2014バージョンしかもっておらず、今後、新バージョンを買うタイミングをうかがうためにも参加しました。どのsoftwareも毎年、新バージョンが出るたびに、アップグレード費用を払わなくてはならないので、フリーランサーの自分にとっては、アップグレードを払い続けるか、打ち切って数年後に買いなおすか、否かの選択は、慎重になるところです。コンファレンスで、2017バージョンの向上された機能を見て、2014バージョン以降にアップグレードをし続ければ良かったと今は後悔しています…。

皆様もご存知のように、Vectorworks Spotlight はVisionというビジュアライザーと提携しているため、Vectorworksのプランをそのままビジュアライズできます（Visionライセンスは有料）。



ETC NomadをCaptureに接続して、事前打ち込み

このコンファレンスに参加していた、ほかのVectorworks ユーザーの話を聞いていると、Visionの画像、安定性、信頼性は、Wysiwygなど、ほかのビジュアライザーと比べると、まだ少し頼りないという印象を受けました。Vectorworks側もそれらの声を聞いたうえで、「近々、VisionをVectorwoksに完全融合します。（つまり、Vectorworksを買うと、もれなくVisionがついてくるという方向性にしたいそうです）。猛スピードで進歩しているVisionテクノロジーは、他社のビジュアライザーと肩を並べるところまできています」と、自信に満ちたトークをされていました。そうなると、今後、プランを２Ｄ用、3D用と二度描きしなくて済むので、一石二鳥です。今後の期待が高まります。

さて、Visionの進展を待っている間に、今どのビジュアライザーを学ぶべきか迷いました。お世話になっている、あかり組の三澤さんや、友人の照明家にいろいろ意見を聞いてみることにしました。

三澤さんにおすすめしていただいたのは、Light ConverseとPrefLight、ロンドンの友人からのおすすめは、WysiwygとCaptureでした。Light ConverseとWysiwygは、現実に近い照明効果を再現できると聞いていたのですが、お値段が高くて今は手が出ません。画像の質、正確さ、信頼性、多様性、値段、使いやすさの面で考慮した結果、最終的にCaptureを学ぶことにしました。学ぶと言いましても、使い始めてみると意外に簡単で、すぐに使いこなせる優れもの。ほかのビジュアライザーもそうかもしれませんが、SketchupやCinema4Dなどの3Dデータもインポートでき、画像もわりと綺麗な仕上がりです。



Captureの仕上がり

偶然にも、Captureを実践で使う機会がすぐに舞い込んできました。コンテンポラリーダンスの初公演が来週インドであるので、音楽のタイムコードと大量の照明キューの事前打ち込みを手伝って欲しいと、イギリス人照明家の友人から依頼があったのです。インド　ニューデリの劇場から送られてきた基礎吊り込みプランがあまりにも簡素化されたものだったので、彼らのムービングライトの機種を見つけ出すのにとても時間がかかりました（というのも、劇場の技術者すら、機種名がわからないという状況で、結局、彼らの卓のパッチを写真で送ってもらい、同じようなムービングのパーソナリティーを探すはめに…）。スウェーデンの会社であるCaptureに、メールで状況を説明し、パーソナリティーをCapture用に作ってもらえるか聞いてみました。「パーソナリティーを作っても構いませんが、これと似たようなムービングを見つけたので、使ってみてください」と、数日後、親切なお返事をいただきました。後から聞いた話ですが、インドに現地入りした友人いわく、どうやらその劇場のムービングとAvoliteそっくりの卓は、どこかで作られたコピー製品だったようです（苦笑）。なにはともあれ、公演は成功に終わったそうで、ほっとしています。

実際、ビジュアライザーはどの程度、照明デザインのプロセスに役に立つか。複雑なセットの間に照明を吊ったとき、ビームの角度を見るために使ったり、エフェクトのタイム調整をするために使うには便利かもしれませんが、10％の明かりの質は、やはりビジュアライザーでは見えません。明かり合わせの時間が全くもらえないとわかっている現場や、ダンス、コンサートなど 、複雑なキューを事前にプログラミングするためには使えても、演劇など、デリケートな光量調整が必要な公演では、ビジュアライザーの出る幕は、ほとんどないかもしれません。10年後のテクノロジーが、どこまで進歩しているかは楽しみですが、最終的な肉眼での判断という照明の一番大事なプロセスは、昔も今も、将来も変わることはないでしょう。